



## 1 プロローグ 爆乳少女聖蘭

7月3日(金) 午後4時22分

市立色彩学園 いろどり とある教室——

放課後のとある教室では、今日も『女子会』が行われていた。

クラスでちよつとした催しをするときさながらに、机を環形に並べて作られた空間で、4人の男子を3人の女子が責め立てている。

先ずは一人、160cmはありそうな背の高い女子。彼女は裸に剥いた男子の足を抱え込み、電気あんま責めをしていた。

ニーハイソックスに包まれたほっそりとした足に容赦なく踏みしだかれたペニスは、すでに何度も絶頂を迎えているようで、お腹や床の上に白濁がまき散らされている。

それでもヴァイブレーションは止まない。

女子は悶える男子を高めから無表情に眺めおろし、足を機械のように振動させ続けた。いま一人は、椅子に腰かけた姫カットの女子。彼女の脚の間には裸の男子生徒——大事な部分に顔を埋め、ペロペロと舐め奉仕をしているのである。

おしつことミルクの臭いがまざったような甘酸っぱい少女特有の芳香に酔い痴れ、夢中になって舌を動かす男子の頭をヨシヨシと撫で、女生徒はニンマリと笑みを浮かべていた。最後の一人、体操着を着たショートカットの女の子。彼女は空間の広さを利用して、スパーリングという名の暴力を加えていた。

手を痛めないように装着された、16オンスのグローブが脇腹や鳩尾を殴打する度に、やんちゃ坊主風の男子は体をくの字に折り、苦しげな呻き声を上げる。

だが、ボコボコにされながらも、股間のモノは芯が通ったように屹立し、衝撃に合わせピコピコと滑稽に揺れていた。

その様子を、もう一人の男子生徒が膝立ちの姿勢で見守っている。次のスパーリングパートナーなるだろう。表情には怯えと期待が浮かんでいるものの、両手の中の小さな雄は、ガチガチに勃起していた。

中央の空間から粹外、窓際の席に目を転じると、そこでは眼鏡をかけたおとなしそうな女の子が、膝の上に寝そべらせた裸の男子の尻や性器を、プラスチック製の分厚い30センチ物差しで、ひっぱたいていた。

腕が振り下ろされる度に、パチインツ！ とスナップの効いた衝撃音が、教室の空気を切り裂く。

清楚な感じの少女だったが、その瞳は眼鏡の下でサディストの愉悅に輝いていた。

真面目そうなこれまた眼鏡の男子は、すでに真つ赤なトマトになったお尻に、痛烈なスパッキングを見舞われる毎に、「わんっ」「あおうっ」と犬の鳴きまねをし、歓喜していた。完全に屹立したペニスが揺れ動く度に、先走り汁が降り零れた。

クラスの後ろにある掃除用具入れの中からは、くぐもった男子生徒の呻き声と、ブーウウウウ——ン……ヴヴヴヴ……と複数のモーターの規則正しい唸りが漏れ聞こえていた。そこに注目する物はだれ一人いない。完全に、ほったらかしにされていた。

更にまた別な一隅では——と、いちいち活写していくとキリがない。

おおむね上述のようなことが、クラスのそここで行われているのである。

男子が14人。女子が10人。外の見張り2人を入れても、男子の方が数は多い。

少年達は男なら怒らずにはいられないほどの辱めを受けているというのに、まるで反抗しようとはしていなかった。むしろ、屈辱の行為に歓喜していた。

この『女子会』と名付けられた秘密の遊戯は、女子から男子へ施される、淫らなイジメに他ならない。一度『女子会』に参加させられた男子は、快樂と苦痛と恥辱に塗れながら身も心も屈服させられ、二度と女子に逆らえなくなるのである。

さて。

『女子会』の発明者である白峰<sup>しらみねせいら</sup>聖蘭は教壇の上にタオルを敷いて坐り、自らも男子を弄びつつ、教室の様子を眺めていた。

聖蘭は○学生とは思えない抜群のプロポーションの持ち主だ。

腰は括れ、尻も大きい。肥満しているわけではないが、全体的にむちむちと肉感的で、肌だつて卑猥な程に艶めかしい。

中でも特に男の眼を誘引して止まないのが、そのたわわに実った胸。

カップはHで目下生長中という、とんでもない代物である。

大人でもここまで発達した乳房を持つ女は滅多にいない。



そんな少女の畸形的なまでに淫らな肉体には、三人の男子生徒が群がっている。

一人は彼女の服の中に上半身を突っ込んだ体勢で、正面から抱きすくめられている。そうなれば、自然に服の下で聖蘭の爆乳に頭を挟み込まれることになる。逃げ場のない空間でその極上の肉感と服の内に籠った少女の体臭に絶えず襲われながら、少年は幸せそうに鳴いていた。

残り二人は黒のニーハイソックスに包まれた足に縋り付き、匂いを嗅いだり、頬ずりしたりしながら、うわ言のように「聖蘭様、聖蘭様……」と繰り返している。

三人の少年は一樣に丸出しになった下半身に手を伸ばし、皮の被った未成熟なペニスを必死に扱き立てていた。

最早三人には、恥も外聞も無かった。頭の中にあるのは聖蘭への崇拜と快樂だけ。

(男子ってチョロすぎ♪ 強がったことを言っても、女の子には絶対勝てないんだから) 淫らな奴隷と化した三少年の様子を眺め、聖蘭は優越感たつぷりの笑みを浮かべた。

聖蘭が自分の魅力に気が付いたのは一年前の夏だった。

ある日彼女は、放課後の教室でクラスメイトにレイプされそうになった。

本能的にセックスの匂いを感じ始めたころの男子にとって、聖蘭の蠱惑的なボディ——薄着になって、さらにアピールの強烈になった——はあまりにも刺激が強過ぎたのである。

だが、そのやり方を知らない男子生徒の衝動的なアタックは暴発という形であえなく失敗に終わった。

被害者だったはずの少女の驚きと恐怖が怒りに変わり、形勢はあつという間に逆転した。

聖蘭は生まれて初めて男子を跪かせ、泣かせ、謝らせ、射精させ、征服した。

今までコンプレックスだった大きすぎる胸や、むちむちした肢体が、男子に対して有効な武器であることを知った。

それは少女にとって奇跡の体験であり、新たな価値観の目覚めでもあった。

それから天啓とも言うべき閃きによって『女子会』という遊戯を開発した。

『女子会』という呼称については、後付けだった。メディアを通じて輸入された大人の世界のワードを、自分達の上している遊びの名前に相応しいと考えるのは、しばしばあることである。

クラスの女子達も誘いを受けその遊びに参加し、徐々に夢中になっていった。

最初はそんなことを出来ないかと拒む女子も、嫌がりながらも徐々に被虐に目覚めさせられていく男子と同調するかのようになり、嗜虐の味を占め、嵌っていくのだった。

『女子会』に参加する女子の増加に伴い、イケニエとなる男子の数も増えていった。

初めて『女子会』の『呼び出し』を受けた男子は当然のごとく反発する。

だが、強烈なトラウマを刷り込まれ、未成熟であるが故に大事に守ってきた男としてのプライドを粉々に打ち砕かれ、快樂という濃厚な果実を与えられ、少年なりに考え、苦惱して築き上げてきた価値観を完全に塗り替えられてしまうのだった。

“女の子様”には絶対に逆らってはいけない——。

“女の子様”を女神様のように崇拜し、奉仕しなければいけない——。

“女の子様”にして頂くことは、どんなことでも悦びである——。

そんな考えを、無意識のレベルにまで摺り込まれてしまうのである。

現在、クラスのほとんどの男子、いや、学年の男子の半分は女子達の共有の『玩具』に成り下がっている。

これからは上級生や、下級生にも、この楽しい遊びを広めないといけない。聖蘭はそんな風に考えていた。

『女子会』の考案者であり誰よりも巧みに男子を飼い慣らし、白いお漏らしをさせる聖蘭は、たちまちクラスの女王様になった。

男子も、女子も、誰も聖蘭には逆らえなかった。

そんなことをしてはいけないと、正義感を振りかざして楯突いてくる男子もいた。

しかし、彼は『女子会』のメンバーによる『裁判』にかけられ『処刑』され、今では女子の靴を悦んで舐める犬と化していた。

いや、無防備にさらした。ペニスを踏みつけられて歓喜する、犬以下の存在だった。

もちろん、『女子会』のことは大人達には秘密だった。

聖蘭にはシステムを維持しようとする知恵と、それを可能にする知能があった。

彼女の巧みな嘘は、いつも真実と等しかった。

1度だけある女の先生にバレそうになったこともあったが、最終的には勝利を収めた。

密告者の男子二人は、すぐに発見され、女王によって入念に『説得』された。

聖蘭の爆乳にプライドを押し潰された彼らは、もう二度と聖蘭様及び女子様に逆らわないことを誓い、服従の証としてドロリとした白旗を上げた。

男なんて、所詮はおっぱいが好きなだけのガキ。虐められるのが大好きなマゾ。私のおっぱいがあれば簡単に支配できる——。

その侮蔑を含んだ歪な男性観は、現実が面白いように肯定してくれた。

そして、教育実習でやってきた未来の先生を従順な下僕に変えた瞬間、それは絶対的な確信へと昇華した。

学年が上がっても、聖蘭の王国は存続しつづけ学校内で勢力を拡大している——。

「藤堂君も、すっかりせーらにメロメロになっちゃったね……」

聖蘭は乳房の狭間で悶える少年をギュッと抱きしめ、○学生らしからぬ妖艶な笑みを浮かべた。

藤堂栄はこの春に転校してきた聖蘭のクラスメイトである。

スポーツ万能、頭脳明晰、おまけにピアノまで弾けて、顔立ちも整った、上級生からも一目置かれるような、いわゆる“凄い奴”だった。

加えて、あの桜木舞香の幼馴染だった。

栄と舞香にとって、それは運命的な再会だった。

時計のねじを巻き戻したかのように、二人の気持ちは再び動き出していた。

それが、聖蘭には気に食わなかった。

元からぶりっ子で清楚ぶっついていて、花のように愛らしい舞香に、ハッキリと嫌悪を感じていたのである。

だから——。

恋の花が咲き始める直前に、コナゴナに叩き潰してやった。

最初は拒んでいたものの、少し強引におっぱいで誘惑し、可愛がってやると、栄はすぐに聖蘭に夢中になった。

『女子会』に連れていくと、他の男子と同じように、次第に女に虐められる快樂にも目覚めていった。

そんなある日、聖蘭は舞香を『女子会』に『呼び出し』た。

舞香は今まで一度も『女子会』に来たことが無かった。その存在さえも知らなかった。初めて目にする男子イジメに戸惑う舞香に、聖蘭は自分と栄の“ラブラブ”ぶりを見せつけた。

栄は多少の頑張りを見せたが、こつ酷く躰けられた心と体は、いとも簡単に陥落した。

舞香が見ているにもかかわらず、栄は聖蘭の爆乳に顔を埋め、「大好き、大好き」と繰り返し、挙句の果てに白白お漏らしをまき散らした。

舞香は心が引き裂かれたかのように泣き叫んだが、タオルを噛まされていて、声は出せなかった。目を逸らすことも耳をふさぐことも許されなかった。

誰も舞香を助ける者はいなかった。

女子は、顔を真っ赤にして涙を流す彼女を見て可笑しそうに笑っていた。

平時は舞香に優しくしている男子も“女の子様”怖さにただ心配そうな一瞥を向ける以上のことはしなかった。

その日を境に桜木舞香は学校に来なくなった。

そして三日前、自宅のマンションから飛び降りた。即死だった。

クラス全員で参列した葬式で、聖蘭は「とってもイイ子だったのに、なんで……」とインチキの涙を流した。心の中で、せせら笑いながら。

「あああ……ふああああ……聖蘭様あ……」

栄は首を揺すってふくよかな乳肉に頬ずりし、恍惚の溜息を漏らした。

7月の熱気で蒸れた少女の汗の匂いに脳を犯され、両側から押し寄せる魅惑の柔肉に揉みくちやにされ、理性の一欠けらまで、完全に蕩かされてしまっている。

「うふふ……聖蘭のおっぱいばふばふ、気持ち良いでしょ？ 幸せでしょ？ これで、舞香ちゃんのこと、忘れられるよね……」

「忘れるう……もう“あんなやつなんか”どうれもいれすう……聖蘭様におっぱいばふばふしてもらえたら、俺……幸せだからあ……」

「そう、それでいいんだよ。栄君が気に病むことなんて、何もないんだから。あいつは勝手に自殺したただだから……」

栄はついさっきまで、舞香の死を自分のせいだと嘆き悲しんでいた。だが、聖蘭の胸であやしつけられる内に、その悲しみはすっかり揉み消されてしまっていた。

栄の頭の中にあるのは、聖蘭と、その巨大過ぎる胸のことだけだった。

「栄君、真君、竜也君……もつとおちんちんシコシコして……」

聖蘭の命令に、少年達はロボットのように従順だった。

彼らにとって、聖蘭の言葉は親や先生のそれよりも絶対的なものである。

右手でガチガチになった未成熟の男の証を目茶目茶に扱き上げながら早熟の肉体に縋り付き、快樂に染まった喘ぎ声を上げる。

「ふああ、おっぱいがあ、おっぱいがあ……き、気持ち良い……」

「聖蘭様、聖蘭様あ…… んんんっ……」

「あ、あああ……おみ足の匂い、最高ですう……」

「うふふ……必死になっちゃって可愛い……まるで猿みたい……ほら、三人とも良く聞いて……聖蘭が、命令してあげるからね」

少女の面差しに、男を手玉に取る女の優越が浮かぶ。

そして、少し間を開けてから、

「……イけ！」

「あ、あああああっ——」

少女の言葉が引き金になったかのように、三人の男子は一斉に精液を発射した。

ドロドロとした白濁液が机や床にまき散らされ、蒸れた教室の空気に、若い雄の臭いが新たにブレンドされる。

三人の少年は、放出を終えると聖蘭に身を委ねたままぐったりと弛緩した。

「はい。お疲れ様。一杯ビュービューできたねえ……」

聖蘭は優しい声音を作り、乳房と服の上から栄をギョツと抱きしめた。

栄は荒く息を吐きながら、呻くように「聖蘭様あ……大好きだよお……」と漏らした。好きだったはずの幼馴染を失った少年には、もう聖蘭以外にすがりつけるものは無いのであった。

他人の物を奪うことが、こんなにも楽しいなんて——。

背筋を這い上がるゾクゾクとした興奮に、聖蘭は恍惚となった。

特に虫唾が走るほど嫌いだっただ桜木舞香から奪っただけに、悦びはひとしおだった。

一方で、奪い取った戦利品、即ち、藤堂栄個人への執着はすでに薄れ始めていた。

両足に縋り付く二人よりも、少し質の高い玩具といった程度の特別さしか感じられなかった。

その理由が、栄がもう完全に自分の物になってしまったからだとすることに気が付くのに、時間はかからなかった。利発な少女なのである。

もっと、奪いたい。誰かから、大切な誰かを奪いたい——。

真っ先に思い浮かんだのは、このクラスの担任教師の黒谷薫だった。

名案だ。聖蘭は表情にまでほくそ笑みが出てくるのを抑えられなかった。

黒谷薫は今年で28になる体育の教師だ。

体育教師と聞いて連想されがちな熱血漢ではなく、どちらかというと控えめな性格で、怒っても大声や手を上げず、良くないことがあれば落ち着いてその理由を言って聞かせるような人格者だった。

顔立ちも俳優のように整っていて、女子生徒の中には叶わぬ好意を寄せる者も少なくなかった。男子からの信頼も厚いようだった。

だが何より聖蘭にとって意味を持っていたのは、去年担任だった赤城恵子の夫だという事実である。

赤城恵子は、学校内にもう一人赤木という先生がいたため、生徒からは恵子先生と呼ばれていた。

少し地味だがボブヘアの似合う美人で、物腰が柔らかく、料理や縫物が得意な家庭的な女性で、男子からの人気が高かった。将来絶対結婚すると宣言する声もあった。

そんな恵子先生のが、聖蘭は大嫌いだった。

もちろん、表面上はよろしくやっていたが、桜木舞子と同じで何となく、生理的に受け付けないタイプだった。

しかし、嫌いな理由はそれだけではない。

この恵子先生には『女子会』がバレそうになったことがあるのだ。

聖蘭の機知と立ち回りによって、自らが女王として君臨する王国の崩壊は避けられたが、恵子は聖蘭への疑いを晴らそうとはしなかった。

表だって何かを言ってはこなかったが、明らかに眼を付けられていた。

そのため、『女子会』はしばらくの間活動を自粛しなければならなかった。

だから、終業式の日、恵子先生が退職するという知らせを聞いた時には、周りの眼も気にせず、聖蘭は小躍りしそうになった。

これで大嫌いな女にニセモノの笑顔を振りまかなくて済む、これでまた学校で『女子会』の活動が出来る。それが嬉しくてたまらなかった。

けれど――。

気に食わないことは、いつも初めは嬉しいことであるかのように振舞うものだ。

学年が上がり、新しく担任になった黒谷薫は、少し照れたように、しかしとても幸福そうに恵子先生との結婚を生徒たちの前で発表したのである。

女子の中には素敵な先生に奥さんが出来たことに落胆を隠しきれない者もいた。

聖蘭はなにより赤城という嫌いな苗字が黒谷に代わったことに強烈な不快感を覚えた。

二人はかなり以前から交際していたらしく、少しずつ準備を進め、春休みの間に入籍し、身内だけで密やかに式を挙げたのだと聞かされた。

職場結婚は色々と問題がある。恵子の退職は、そのために行われたのだ。

騙された気がした。聖蘭は恵子のが、前にもまして嫌いになった。

あの嫌な女から、黒谷先生を奪ってやる――。

思いつきはすぐに計画へと変わった。計画の成功のためには何をすべきか。聖蘭は焦らずじつくりと考えることにした。

教室のあちこちでは、今なお男子への加虐が行われているが、すでに陽が傾きかけていた。窓の外から聞こえていた保育学級の生徒のはしやぎまわる声も、もう聞こえない。

本日の『女子会』もあと少しでお開きだ。

## 2 小さな幸せの形

7月24日(木) 午前7時15分  
プラウド彩都 603号室 黒谷夫妻宅――

薄い塩水で湯がいたインゲンを小鉢に盛り付け、胡麻と鯉節をふりかけると、黒谷恵子はそれをテーブルに配膳した。

卓上にはすでにサケの切り身、豆腐とわかめの味噌汁、ナスの漬物が並んでいる。あとは、白いご飯をよそうだけだ。

キッチンから漂う好い匂いに誘われたのか、恵子の夫、薫が朝刊を片手にダイニングにやってきた。顔はもう洗ったらしいが、まだ少し眼がトロンとしていた。

今日はプール解放があるため、午前に出勤しなければならぬ。

生徒達は夏休みでも、研修だとか、事務作業だとか、授業の準備だとかで、世間が思っているより忙しい。他になりたいものが無く、半端な気持ちで教師を選んだ恵子は、初年度にそのことを痛感させられたものだ。

「お、今朝は和食か」

テーブルの上の料理に目をやり、大きな欠伸をして薫が言った。

「あら、お気に召しませんか？」

「いえいえ、かたじけのうござる」

「もう、変な言葉使わない」

二人が笑い合いながら向かい合わせでテーブルに腰かけ、朝食が始まった。

結婚から、そろそろ4か月が過ぎようとしていた。恵子は今でもまだ、性が黒谷に変わったことに戸惑いを覚えることもあったが、新婚生活は順風満帆だった。

恵子が薫と出会ったのは、色彩学園いろどりに新任教師として赴任した時だ。

職員室で隣の席になったのである。

目元が穏やかで、鼻の形が綺麗で、それこそ顔立ちはタイプだったけれど、体育教師だと聞いて、今までスポーツマンという人種に偏見を抱いていた恵子は、初め薫のことを好きにはなれなかった。

しかし、同じ職場で働き、先輩としてあれこれと指導をされる内に、その気持ちは変わっていった。

薫は体育教師にありがちな、短絡的な激情と熱血をはき違えたような人間ではなかった。恵子が思っていたよりもずっと思慮深く、大らかだった。

生真面目で面倒見がよく、生徒の間で何か問題が起こった時でも声を張り上げたりはせず、話を良く聞き、時々に応じて叱ることや褒めることが出来た。

その一方で、生徒の目線に立って、生徒の心の切なさを理解できる、そんな珍しい大人でもあった。

弱い一面もあるが優しく、少し子供っぽいところがありながらも包容力のある年上の先輩教師に、恵子は自然と惹かれていった。

そして、付き合うようになってからは、さらに夢中になった。

それは、互いに互いの足りない部分を補い合うような、パズルのピース同士がカチツと嵌るような、初めて経験する種類の恋愛だった。

薫にテニスやサイクリングに連れていかれた恵子は、身体を動かすことがこんなに楽しいことだったのかと、恵子に夢の国とも呼ばれるテーマパークに連れて行かれた薫は、世の中にこんなに楽しい場所があったのかとお互いに驚き合った。

見える世界が広がった気がした。なぜこの人ともっと早く出会っていなかったのかと、薫との思い出で埋まっていない過去がもどかしく感じられる程だった。

付き合い始めて三月もしない内に、私はこの人と結ばれるのだ、と恵子は確信し、確信は三年という月日を経て、現実のものとなった。

今は――。

自分の手料理をおいしそうに食べる夫の姿を見ると、自然と笑みが零れた。

幸せを一杯に頬張った、まるで屈託のない笑顔だった。

この朝の幸福がいつまでも続けばいい。

恵子は若くして手に入れた家庭という幸福の形に、舞い上がっていた。

「ああ、そうだ」

ふと、薫が箸を止めた。

「今日は帰りが少し遅くなるかもしれないから、昼は一人で食べてくれ」

「今日はプール解放の日よね？ いつもは、お昼過ぎには帰ってくるのに……何か用事でもあるの？」

「うん。クラスの子にもプール解放の後、個人的に水泳を教えてくれて頼まれたんだ。この年で金槌なのは恥ずかしいってさ」

「へえ……誰なの？」

去年は自分が受け持っていた生徒達だ。恵子にも、少し関心があった。

「白峰だよ。ほら、知っているだろう。去年一組だったから……」

「ええ……」

白峰聖蘭のことを思い出した瞬間、恵子の顔が曇った。

聖蘭はいつもクラスの中心的存在だった活発な子で、勉強も良くできるともイイコだ。眼がぱっちりとしていて、鼻筋も高く、ツイントールにした髪が特徴的な絵に描いたような美少女だ。少し舌つ足らずで、自分のことを「聖蘭」ではなく「せーら」と呼ぶところがあどけなく、可愛らしいと教師の間でも評判だった。

しかし、恵子は聖蘭を見ると妙に心がざわついてしまうのだった。

その理由は、単に劣等感のせいかもしれない。

恵子は身長が低く、胸が小さかった。

まな板、とまではいかなかったが、肉付きが悪く、女友達からは女子中学生みたいだと評されていた。

聖蘭の発育の良過ぎる肉体を思うと、自分の貧層な体つきにうんざりさせられた。

「いや。それは幼稚な僻みだ。恵子は表情を取り繕った。」

「それはいいかもね。あなたが教えたなら、白峰さんもすぐに泳げるようになるんじゃない？」

「うん。頼まれたからにはちゃんとモノになるようにするつもりだ」

薫は学生時代には水泳の選手で、スイミングクラブでインストラクターのアルバイトをしていた経験を持っている。

いい年をして金槌だった恵子も薫に水泳を習って、泳げるようになった。

丁寧に優しく、そして時々厳しく泳ぎのコツを教えてくれる、いいコーチだった。今思えば、それが付き合い始める切欠で――。

当時のことを思い出し、恵子はふいに心にとげが刺さったような気持ちになった。また馬鹿なことを考えている。

小さく頭を振ったが、妙なしこりはしばらく取れなかった。

### 3 爆乳少女の誘惑

7月24日 午後0時11分

市立色彩学園 プール――

「膝を曲げたらダメだ。バタ足の時はピンと伸ばして水面を蹴るんだ」

「えー……うわっふ、それむつかしいよっ……ふはっ……」

プールの縁につかまった聖蘭はアップアップと水を飲みながらコーチ役の薫に抗議した。

「難しくても、そうしないと前に進まないぞ。ほら、こうやって。イチ、ニ、イチ、チつてさ」

指導しつつ、臨時コーチは聖蘭の足を取って、ゆっくりと綺麗なバタ足をさせた。

「ええと……こ、こう？」

足を動かすのに集中しているのだろう、ゴーグルの上の眉が険しくひそめられる。

以前はゴーグルの着用が禁止されていたが、刺激に敏感な眼を塩素のキツイプールの水に長時間晒すデメリットは、水中で眼を開けられるようになるメリットよりも大きいとの理由により、この学校では二年ほど前からプール授業でのゴーグルの着用が新たなルールとなった。

それでも、何人かの生徒はゴーグル着用を避け、裸眼のまま泳いでいる。

ゴーグル着用ルール化推進の急先鋒だった薫だったが、その感覚は何となく理解出来ていた。彼も中学に上がるまではゴーグルが嫌だった。頭の鉢が締め付けられる感じがするし、何となく世界が狭まるからだ。

それに、プールの中ではいくら視界がクリーンになった所で、川や海のように面白いものは見られないし……。

バタ足の補助をしつつ、昔のことをぼやぼやと思いついで出している内に、薫が手を離しても、さつきまでのように聖蘭の膝は曲がらなくなっていた。

「そうだ。なかなか上手いぞ白峰。それを、少しずつ早くしていくんだ」

少女の足が綺麗なフォームを保ったまま、バシヤバシヤと水面を叩く。

うん。わりと筋は良い。薫は聖蘭の上達の速さに感心した。

息継ぎは少々不格好で、溺れる犬めいているものの、体の動かし方は悪くない。

聖蘭は水泳以外のスポーツはかなり得意だった。

走るのも早いし、ドッジボールをやっても、男子顔負けの球威とキャッチ力でいつも最後まで残る。運動のセンスはあるのだろう。

夏の熱い空気の中、ジジジジジ……という暑苦しい蝉の鳴き声と、バシヤバシヤと足で水を掻く音だけが聞こえている。

25Mプールには、二人の姿しかない。

さつきまで生徒でこった返し、狭苦しい位だったのに、今は広々とし過ぎて寂しく思える。

しばらくして、薫はバタ足を止めさせた。

「もう今日は上がりましょう。疲れてきたし、お腹もすいたろ？」

息継ぎの練習をさせて、水に浮く練習をさせて、バタ足のフォームも見た。だいたいどれくらい泳げるのかはわかった。

水に顔をつけられない、というレベルの金槌ではないし、あと何日か練習すれば、25mを泳ぎ切ることも出来るだろう。

「えー、聖蘭まだまだ平気だよ。てゆーかさあ、さっきからなんか地味な練習ばかりつかまんない。もつとこう、バーツと一発で泳げるようにならないのお？」

聖蘭はぷーっと頬を膨らませた。そんなふうにしても、可愛らしい顔立ちだった。スタイルこそ少女離れしているが、中身は普通の女の子と変わらない。

生意気で、少し甘えた所もあるが、素直ないい子だ。

薫はそんな聖蘭に好感を抱いていた。

「バーツとって、そりゃいくらなんでも無理な相談だ。何事も基礎練習が肝心だからな。だけど、そうだな……そんなに元気が有り余っているのなら、最後に思い切って25メートル泳いでみるか」

「へ？ 冗談キツイよせんせー、いきなりそんなの無理。聖蘭いつも向こうまで辿り着く前に沈んじゃうんだよ」

少女は笑って反対側のプールサイドを指した。幅は12Mだ。

「だから、これを使うんだよ」

薫はプールサイドにある用具入れから普段授業では使わないビート版を取り出し、聖蘭の目の前に放り投げた。

硬いスポンジ素材で出来た黄色いビート版が、キラキラ光る水面に浮かぶ。

「これを使えば沈まないぞ。ゆっくりでいいから、こっちの端から向こうまでバタ足だ」

「はー……やっとなつた」

「よく頑張ったな白峰。まさか、途中で止まらずに泳ぎ切るとは思わなかったよ」

薫が声をかけると、聖蘭はゴールグルを上げてエへへと笑ってVサインを作った。

右へフラフラ、左へフラフラと蛇行しながらも、ビート版をたよりに、どうにか足をつかずに25mを泳ぎ切ったのである。

「足着いたら負けかなーって……だけど、何かすごい疲れちゃった。せんせー引き揚げて♪」

少女は片手で水泳帽を取り、もう片方の手をプールサイドの薫に差し出した。水泳用のお団子ヘアーは少女をいつにもまして幼く見せていて、チャームポイントであるあどけない笑顔は魔法のように男性教師の父性をくすぐった。

「まったく、しょうがないな」

微笑笑を浮かべ、薫は身を屈めて手を伸ばした。

本当に良く頑張ったんだ、それくらいワガママは聞いてやろう。

「ホラ」

「せんせーありがと♪ よいしょっ」

薫の手を借りて、聖蘭はプール際の段差に足をかけた。

と、その瞬間。

(う……)

視界に飛び込んできた光景に、薫は思わず息を飲んだ。なるべく見ないように努めていたのに、つい目をやってしまった。

ざばあっ……と大量の水を押し上げて浮上してくる、少女のものは思えない爆乳……。重たそうな二つの肉の果実が、しつとりと濡れたスクール水着をパンパンに張りつめさせていた。

白いワツペンに油性マジックで書かれた「しらみね」という文字が、目一杯引き延ばされてる。

相変わらず、○学生とは思えないような凄い体だ――。

淫靡さの尻尾のようなものが、薫の心の中をさつと横切った。

ゴクリと、無意識に唾を呑み込んだ、その次の瞬間。

「わっ!!」

「うわわっ!!」

突然、聖蘭がバランスを崩して後ろにのけ反った。

薫は思い切り手を引っ張られ、見事に前にのめった。

まずい。そう思った時には、水面が目の前に迫っていた。

ザバン。大きな水音が一瞬耳に入り、すぐにくぐもった。

鼻に水気が流れ込んでくる。

溺れる――訳は無い。このプールは深いところでも、余裕で足は届く。

「ぶはっ……!!」

動転しながらも、体を捻って水面に顔を出し、大きく息を吸った途端、

「せんせー！ 大丈夫!!」

むにゅと、柔らかな感触が右腕を包み込んできた。

その正体は、少女の年齢不相応に巨大な乳房。

心配した聖蘭が、助け起こそうと腕を取って、胸の谷間に抱え込んだのである。

ズクン――と、薫の下半身に不随意の反応が起こった。

「わっ!!」

まずい。薫は強奪するように腕をひっこめ、後ろを向いて前屈みになった。

そんな過剰な反応に、巨乳少女はあどけない面差しに心配と不思議さが入り混じった表情を浮かべる。

「どうしたのせんせー？ 落ちた時にどこか怪我したんじゃないの？」

「い、いや。なんでもない」

「うそ。絶対何かあったでしょ」

そう言って、聖蘭は体育教師に後ろから抱きついた。

自然、巨大な乳房が、背中をむにゅと柔らかく潰れる。

「こらっ、白峰。ふざけるんじゃない」

冷静さを装って注意しながらも、薫の心中はざわめき立っていた。

AVでも見たことが無いような、特大のおっぱい。

その魅惑的な肉の感触を背後にハッキリと感じていた。

さっきの光景——特注のスクール水着がばっつんばっつんに張りつめている様子が脳裏をよぎる。

腕には生々しい感触の余韻が、いつまでも消えずに残っている。

(くそ……何考えてんだ俺は。自分の生徒だぞ)

ずっと、意識しないようにしてきたのに。準備体操をしている時も。他の生徒達とふざけ合う姿を目にした時も。泳ぎ方を教えている時も。ずっと。

それでも授業中や、コーチをしている時は、そっちに集中していたため、平気だった。けれど、集中力がほつれた刹那に、邪念が紛れ込んで来たのである。

ひとたび考えてしまうと、それはなかなか頭から離れてくれない。

鎮まれ、鎮まれと念じる程、ふしだらな気分は、どこまでも発散していった。

ズキリズキリと疼くような感覚と共に、男の器官がますます充血していく。

選手時代からの習慣で着用していた競泳用の水着に、その形が浮き上がる。

冷たい水の中、熱い塊の輪郭は嫌にくっきりしていた。

「白峰。頼む、離れてくれ。怪我した訳じゃないんだけどさ。今、ちょっとまずいんだ」

薫がそう言うと、聖蘭はふーん、と鼻を鳴らし、

「ねえ、せんせー。もしかしてさあ……」

グツと背伸びをして、ゾクリとするほど妖しい声色で囁きかけた。

「ボツキしちゃった？」

「なっ?! お前っ、なんてこと……」

薫は一瞬、自分の生徒が何を口にしたのか分からなかった。いや、理解することを頭が拒んだのだ。そもそも、なぜそんな単語を知っているのか。

「やだあ、せんせー。あたしだって、ボツキくらい知ってるよ。男ってコーフンするとカイメンタイがジュウケツしてボツキ状態になるんですよ」

保健体育で習ったのだろうか、間違っではないが嫌に堅苦しい表現だ。

男子には薫が教えたけれど、女子は女性教員が指導していたから、彼女らがどこまで異性に対する知識をもっているのか、わかっていなかった。

「せんせー、せーらでコーフンしたんですよ」

「そ、そんなわけあるか。生徒相手にそんなこと……」

あつてはならない。倫理なんてものを持ち出す必要すらない、当たり前の話だ。

なのに。そのはずなのに。下半身の熱は一向に収まってくれない——。

「じゃあ、これは……なあに？」

聖蘭はくすくすと笑いながら競泳パンツ越しに、完全勃起したモノを握り込んできた。小さくて柔らかい少女の手のひらの感触に、男の器官は悦ぶように脈打った。

「いやくん、やっぱりガチガチになってるよ♪　せんせーダメじゃないウソついたりしちゃ。いつも自分で言ってることだよ？」

「おいやめろっ、白峰……汚いだろ。女の子が、そんなところ触るんじゃない」

不意打ちに狼狽しつつ聖蘭から逃れようとしたが、水の中で、しかもこうまで密着されては体力に勝るとはいえ、なかなか上手くない。

かといって、暴力という手段は無しだ。それをしたら、教師失格だ。

「くすくす……恥ずかしくならなくて大丈夫だよ、せんせ♪　男子ってみんなこうだもん」

「は？ みんな……？」

「うん。みんな♪ パンツ見せてあげたり、ちょっとおっぱい押し付けてあげたりするとね、すぐにコーフィンして、ボッキしちゃうの♪ せんせーも、せーらのおっぱいでコーフィンしたんだよね」

「白峰、お前、一体何を言ってる……？」

パンツを見せる？ おっぱいを押し付ける？ 確かに、性に対する興味を覚え始める年の男子が、聖蘭のような性的魅力の結晶のような美少女にそんな事をされたら、たちまち参ってしまうだろう。

けれど、彼女がそんな痴女同然の行いを？ 馬鹿な。信じられない。

頭の中で、大人顔負けの肉体を持つ聖蘭が媚を振りまき、男子を誘惑する情景が像を結ぶ。それは、言葉にできないくらい淫らで――。

(何を考えているんだ、俺は……)

教え子の淫らな豹変に薫の頭はますます混乱していく。

「それでね、ボッキしたおちんちんを、こーやってシコシコしてあげたらあ……」

聖蘭はくすくす笑いを浮かべ、水着越しにペニスをリズミカルに扱き上げ始めた。

柔らかな手のひらが、生地の上から硬く筋張った竿を摩擦する。

下半身全体が甘く痺れるような心地よい刺激に、薫は思わず腰を引いてしまう。

「うあ……おい、白峰……くうう、やめろお……」

「あつは♪ 先生も、クラスの男子達と変わらないね。おちんちんちょっと扱いてあげただけで、あーん、だめーって気持ち良くなっちゃうんだもん」

「そ、そんなわけ……俺は生徒相手に興奮もしないし、ましてや気持ちよくなってる……歯を食いしばって言う。常識的に考えて、そうでなければならぬ。」

それに、こんな少女にいいように感じさせられるなんて、大人の男としてあってはならないことだ。

「えーホントかなあ？ じゃ、直接触っても、大丈夫だよな」

「なっ!! 止せー!」

薫の制止も聞かず、聖蘭は水着の中に手を滑り込ませてきた。

熱くいきり立った男の象徴を、小さな手のひらが捕獲する。

途端、聖蘭は「あれ？」と、不思議そうな声を出した。

それから、少し間をおいて忍ぶような嘲るようなクスクス笑い。

「やだ……せんせーのおちんちん、ボッキしてるのに皮被ってる……♪」

「あう……」

コンプレックスを無慈悲に抉られ、薫は顔を真っ赤にした。

学生時代から、ずっと気にしていた、肉体的欠陥。

手術するべきかと真剣に悩んだが、恵子は気にしなくていいと、優しくそれを受け入れてくれた。だから、もうあまり意識しなくなっていたというのに。

「せーらこれも知ってるよ。シンセーホーケーっというんでしょ……クラスの男子もだいたいこうだけど、大人はそうじゃないはずなんだけどなあ……クスクス……」

素直な、しかしそれだけに残酷な言葉の棘が、次々と心を突き刺してくる。

教師として、注意しないとイケない。が、薫は何も言い返せなかった。

「せんせーのちっちゃいちんちん、せんせーらの手でビクビク震えてる……可愛い♪  
たくさん、弄んであげるね」



巨乳少女の手が、再びリズムミカルな律動を開始する。  
生地越しても心地よかった少女の手のひらが、直にペニスを刺激してくる。  
裏筋を指で押さえながら、皮を剥きおろし、また戻す。  
露出するタイミングに合わせて、反対の手で敏感な亀頭周辺の性感帯を優しく、甘く刺激してくる。

さらに、手の動きに合わせて合わせるようにして、たっぷりの肉の詰まった胸を、背中にグイグイと押し付けてくるのだから堪らない。

いつしか薫はコースの端に寄りかかるような格好になっていた。  
気持ち良さのあまり、膝や腰が滑稽なくらいガクガクと震えた。

「やめるんだ白峰……あう、こんなこと……するもんじゃない」

「やめる？ でも、ボツキしてるんだから、もっとして欲しいってことなんですよ？」

「そ、そんなわけ……」

「なら、このおちんちん小さくしてみたら？ 出来ないでしょ？」

「そ、それは。あううう……」

聖蘭は威圧的に問い詰めつつ、弄ぶような手つきでペニスを扱きたて続ける。

自分の生徒であるはずの少女に、思い通りに翻弄される屈辱に震えながらも、心も体も快感に痺れ、薫はまるで抵抗が出来ない。

「白峰……それ以上、されたら……俺……」

うっとりするような甘い手コキと巨乳の圧力を同時に味わわされ、体はもうすでに屈しようとしていた。

「せーら知ってるよ、もうすぐシャセーしちゃいそうなんですよ。とっても気持ち良い白いお漏らし……男子ってあれ、大好きなんだよね。最初はおちんちん虐められるの嫌がってた子も、一度シャセーさせてあげたら、何回もおねだりするようになるんだよ♪」

「くあ、ああ……そんな、お前、男子にいつもこんなことしてるのか……？」

薫の問いかけに、聖蘭は、「うん。とっても楽しいから」と何でも無いように返した。

「男子ってね、舐けのなっていない犬みたいに生意気だけど、こうやっておちんちん扱いたら、すぐに顔真っ赤にしておとなしくなっちゃうんだよ。ほんと、ちよるいよね♪」少女の口から語られる言葉によって、快感に痺れる脳の裡側にクラスの男子に性的虐待を加える巨乳少女の姿が、脳裡にまざまざと描き出される。

まさか。あの白峰が。今まで担任教師が抱いていたイメージとは、あまりにもかけ離れていた。

信じられなかったし、信じたくは無かったが、少女の手慣れた手さばきを見せ付けられ、味わわされて、信じないわけにはいかなかった。

「どれだけ生意気な男子も、最後はごめんさいって謝りながら、白いお漏らししちゃうんだよ♪ くすっ……男子みたいに、せんせーのセーエキ、せーらが搾ってあげるね♪」

「やめろ、白峰、やめ、くあ、あ、ああああっ……」

水着に潜り込んだ手がスピードアップする。

激しいだけでなく、男の性感ポイントを熟知した、有り得ない程巧みな少女のテクキ。先程の言葉を裏付けるような魔性の手さばきが薫を絶頂へと一挙に追い上げていく。

一往復毎に射精欲求が高まり、下半身が蕩けてしまいそうになる――。

「あく……もう、我慢出来ない……ううう、い、いくうううっ――」

「はーい、ストップ♪」

だが、今まさに達しようとする寸前に、聖蘭は水泳パンツから手を抜いてしまった。後一擦りで、射精出来たのに――。

オアズケを喰らった薫の腰が、虚しげにヒクッヒクッと痙攣した。

「あはは♪ せんせーたらおつかしく……いくううううだっ。たったこれだけで果てそうになるなんて、せんせーって、そーろーなんだね♪」

「あうっ……そんな、どうして……」

つい、薫はさがるような眼差しを巨乳少女に向けていた。

「なーにー？ 止めて欲しいんじゃないの？ あれだけ拒んでた癖に、やっぱりせんせーも、せーらに搾られたかったんじゃない♪」

少女のあどけない顔に浮かぶ、ニヤニヤといやらしい笑みを見て、薫ははっと我に返った。

「いや、い、今のは違う……」

「何が違うの？ 素直になりなよせんせー。素直なのはいいことだって、せんせー前言ってたじゃない。ほら、素直になって、せーらにおねだりしてよ。そしたら、気持ちよく、ドピュドピュお漏らしさせてあげるよ♪」

にねっとりした少女の囁き声。

熱い吐息が肌をムラムラと撫でる。

胸乳が巨大な質量を誇示するように、むにゅむにゅと背中を圧する。

ふしだらな欲望が、徐々に理性を汚染していく。  
ダメだ——薫はかぶりをふった。

教師と教え子。何より、自分は妻帯者だ。流されてはいけない。

「そんなこと、言う訳ないだろ……だって、俺はお前の——」

「あっそ」

冷淡な呟きで薫の言葉を遮ると、聖蘭は再び水着の中に手を滑り込ませた。

「あうっ……し、白峰……よさないか……はあ、あ、あああ……」

少女のほっそりとした手が、指先に力を込めて、シユシユシユ……と、小刻みにペニス全体を扱き上げる。

滑らかな手のひらが皮の上からサオやカリ輪を擦過するのに連動して、薫の口から鼻にかかった喘ぎが漏れた。

収まりかけていた射精衝動が、再びグングンと内圧を高めていく。

「ねえ、せんせ。大人のくせに、せーらみたいな女の子に手玉に取られて情けないと思わない？」

少女の言葉が屈辱感を煽り立てる。

しかし、快感に思考をかき乱された薫は喘ぎ声以外何も発することが出来ない。

「ま、抵抗なんて無理だよ。男ってさ、おちんちんちよつと可愛がられただけで、何にもできなくなっちゃうんだもん」

聖蘭はペニスを摩擦し続けながら、きやはは、と無邪気に笑う。

少女のそれとは思えない巧みな手コキが教師を追いつめていく。

そして、また絶頂が間近に迫ったところで——。

「はい、ストップ♪」

手の動きが停止する。

直前で不発に終わった砲身が、ヒクヒクと戦慄いた。

精液が押し戻されたみたいに、薫の下腹部にもやもやとしたものが蓄積する。

「辛い？ じれつたい？ で・も、イかせてあげな〜い♪」

「はあ……はあ……うううっ……」

頼むから、イかせてくれ。口をつけて出かけた言葉を、薫はどうにか呑み込んだ。

「ふふふ、耐えてる耐えてる……でも、せんせーいつまで我慢できるかな〜♪」

けれどまた再び指先が屹立を刺激し始めると、引き結んだ唇はだらしなく解けてしまう。大人の、しかも教職にある男が、教え子の少女にいいように弄ばれている。

傍から見たら、それは滑稽なくらい情けない光景だろう。

あまりの恥辱に顔を真っ赤にする薫を見て、聖蘭は勝ち誇ったようにニンマリと笑った。

「今度はあ……こっちも弄ってあげるね」

少女の空いた左手が、薫の元水泳選手らしい逞しい胸板に忍び寄り、そのなよやかな指先で、樺色の突起を弄くり始めた。

「あふっ……なっ、白峰、どこ、触って……ひあっ……」

「あはっ、変な声〜♪ せんせーもおっぱいで感じちゃうんだ……」

「そんなわけっ……ないだろ……」

「あっそ。じゃあ乳首の快感、せんせーにたっぷり教えてあげるね」

乳頭を指の腹で押し潰したり、全体をクリッ、クリッ、と捏ね回したり、乳暈の周囲をなぞったり、少女の悪戯な指先は変化を付けて胸の突起を刺激してくる。

その慣れた指捌きは、戯れに触れているというレベルではなく、相手の体に快感を刻み付けるためのいやらしい愛撫以外の何物でもなかった。

ものの十秒もしない内に胸全体がじんじんとした甘い疼きに支配され、乳首は充血し芯が通ったように硬くなっていった。

「あは♪ すぐにぷくって膨らんじゃって……男子って、こうやって乳首可愛がつてあげると馬鹿みたいに悦ぶんだよ。顔をトロトロにしちゃって、もう気持ち良いこと以外なくんにも考えられなくなるの……」

「あくっ、あ、ああっ……あんっ……」

充血した乳首をキュッと捻られ、カリカリと爪で引っ搔くように愛撫され、薫は顎を逸らせてビクビクと体を震わせた。

性を刺激された時とは異なる、ぼんやりと掴みどころのない、しかし形容し難いほど気持ちのいい感覚。

それが、神経を通じてペニスの快感と結束し、蕩けそうな恍惚感を生み出していた。

「せんせーも、すぐにそうしてあげる……あ、ちがった。もうそうやってきてるね……」  
くすくすと悪戯っぽく笑い、巨乳少女は二か所の勃起を同時に、巧みに責め上げていく。  
だが、薫の絶頂が近づくと――

「ああっ……あひ、ああ、あああ……」

「はっい。ストップ♪」

驚くような正確さで、ペニスへの刺激を止めてしまう。

しかしなおも乳首への愛撫は続けられているため、気持ち良さが継続しているのに、達せない、そんな不完全燃焼の虚しさだけが薫の中に蓄積していく。

「腰引いてガクガク震えちゃって……せんせーってば完全にせーらのテクニクに翻弄されちゃってるね♪」

そして、射精感の潮が引いて来た所で、再開される少女の巧みな摩擦運動。

7月後半の烈日が照りつけるプールの中で、中途半端なヒートアップとクールダウンを繰り返される。

もどかしい。じれったい。イきたい。イかせて欲しい――。

だがしかし、それを口にするわけにはいかない。

教師として、大人として、男として、威厳を保たないといけない。

そう思いつつも、力任せに振り払おうとしないのは、少女の言う通り、その卓越したテクニクにモノの見事に翻弄されてしまっているためばかりではなかった。

（あはは、効いてる効いてる……）

聖蘭は自分の腕の中で切羽詰った様子で悶える担任教師子をじつくりと観察し、内心でニヤニヤと笑った。

もう“この男”の体は完全に自分の手中にある。

後は、じつくりと責め抜いて精神が崩れるのを待つだけだ。

男の体の構造なんて、大人でも子供でも同一だ、蕩けさせ方は知り抜いている。  
 聖蘭は今まで男子生徒を相手に培ってきたテクニクを総動員して、担任教師をじわじわと追いつめていく。

輪っかにした指で、カリを執拗に刺激したり、露出させた亀頭に5本の指をつつつ……と這わせたり、握りを緩くして焦らすようなスローペースで扱き上げたりしながら、硬く尖った乳首を転がすように愛撫した。

どの技も効果はテキメンだった。

大の大人が、しかもいつも真面目で実直な教師が、自分の指先一つでよがり声を上げ、快感に慄いている。

上に立つはずの相手を、完全に支配コントロール出来ているという事実が少女の征服欲を満たし、嗜虐の興奮を高めていく。

「はい、またストップ♪」

「あぐっ……あ、あああ……」

「情けない声、大人なのにせーらみたいな女の子に弄ばれて悦ぶなんて、せんせーって、ロリコンの変態さん？」

「あうっ……あ、あああ……くうう……ち、ちがつ、あああ……」

嘲笑と軽蔑を織り込んだ言葉責めに、手の中で薫のモノが反応した。

ほんのわずかな揺らぎだったが、それを少女が見逃すはずは無かった。

（やっぱり、先生もクラスの男子オモチャと同じ、どうしようもないマゾなんだ——）

巨乳少女は教師を責め上げながら顔にも声にも出さず、心の中でせせら笑った。

「あっ、くうっ……ふ、あううう……」

聖蘭がその豊満な巨乳を押し当てつつ、一定のリズムでペニスを扱き上げ、乳首を弄ぶ。

柔らかな感触と甘い快感の板挟みになって、薫はただ情けなく悶えることしか出来ない。完全に、少女のなすがままだった。

魔性とも言うべき少女のテクニクがもたらす極上の快樂刺激。

膝が笑い、腰がヒクつく。

頭の中にピンク色の靄がかかり、上手く思考がまとまらない。

官能が高まり、腰の奥で熱いマグマが渦巻く。

が——。

「はーい。ストップ♪」

「あううっ……」

寸前で手が離れ、水着の中でガチガチに勃起した雄が虚しく戦慄いた。また、だ——。

薫の顔に、熱さとは原因の異なる粘っこい汗がにじむ。

「うふふ、腰へコへコさせちゃって、みっともなあい……」

「あああ……あ、あああ……白峰、もう……」

腰を無様にくねらせ、肩を喘がせ、泣きそうな声を振り絞る。寸止めの回数は、もう8を数えていた。

いきそうになっても、まるで機械で計ったかのような絶妙なタイミングで刺激を止められ、もどかしさは許容できないレベルにまで達していた。

そんな薫を小悪魔チックな嘲笑と愉悦の入り混じった表情で見据え、いきり立ったモノを指先で甘弄りしながら、聖蘭が訊ねる。

「ね、せんせ。そんなにシャセー、したい？ だったらあ……最初に言ったよね……」  
少女は今にも頰れそうな程に腰を落とした薫の耳元に唇を寄せ、甘い吐息とねっとり囁き声を耳の穴に吹き込んだ。

「イかせてくださいっておねだりして♪ せんせ♪」  
自分の生徒におねだりするなんて――。

薫はかろうじて残った理性を総動員して、誘惑に抵抗した。

「黙っちゃって。おねだりできないの？ なら、もうこのまま止めちゃうよ？」

竿を握っていた手が、ぱっと離れる。

気持ちのいい刺激が、逃げていく。

瞬間、薫はつい、あつ、と声を上げてしまっていた。

聖蘭が、ニヤリと笑う。

「やっぱり、嫌なんじゃない……くすくす……♪」

小さな手が触れるか触れないかの、絶妙な加減でサオをそっと包み込む。

その状態でシッコシッコ……とゆっくりとした上下の摩擦を与え、同時に乳首をクリクリと捏ね上げつつ、聖蘭は爪先立ちをして薫の耳元にコシヨコシヨと囁きかける。

「ほら、イかせて、ってせーらに言うだけでいいんだよ。ただそれだけ、簡単なことだしよ……それだけで、せーらの手の中で、気持ちよくおせーしドピュドピュできるんだよ？」

「はあああ……あああああ……」

耳どころか脳味噌までゾクゾクさせる甘ったるい囁き声と、もどかし過ぎる刺激が教師としての倫理観や大人の男としてのプライドを、徐々に蕩かしていく。

射精したい。出したい。このまま、彼女の手の中で、果ててしまいたい――。

ドロドロとした劣情で、思考が埋め尽くされる。

「ほら、こんな刺激じゃ物足りないでしょ？ いいんだよ、素直になって……我慢は体に毒だよ……ほら、せんせ……ほらあ……」

トドメとばかりにネロリと耳を舐め上げてきた。

あまりにも甘美な誘惑だった。これ以上、我慢するのは不可能だった。

狂おしい程の焦燥感に耐え兼ね、薫はどうとう屈服した。

「あう、うううう……し、白峰……」

「なぐに？ せんせ♪」

「い、イかせて……」

「え？ よくきこえないーい♪ くすくす……」

聖蘭は明らかに小馬鹿にした態度で、完全に堕ちた教師を追いつめる。もう薫にそんな些細なことに拘泥する余裕は無かった。

涎をまき散らしながら、みっともないくらい大きな声で叫んでいた。

「い、イかせてくれえっ！ もう、これ以上、我慢出来ないんだ……頼むっ……！」  
「はーい。よくできました♪」

聖蘭は勝ち誇った笑みを浮かべ、手の動きを激しくした。

スベスベした手のひらでサオを小刻みに扱き上げられ、もう一方の手に乳首をきゅうと捻り上げられ、薫は身体を弓なりに反らして夏空に歓喜の声を上げた。

「気持ち良過ぎて頭飛びそうでしょ？ 寸止めでたっぷり熟成された濃厚セーシ、教え子の手の中にゼーんぶ出してね、せ・ん・せ♪」

「あ、あ、ああああああっ——！」

皮の上からパンパンになった亀頭を刺激された途端、踏まれたホースのように膨らんだ肉棒がビクンツ、と大きく跳ね上がった。

精管を劣情の濁流が駆け抜け、開き切った鈴口から勢いよく迸り、透明なプールの水がもやもやと濁っていく。

その射精は、今までに味わったこともないような凄まじいまでの快感だった。

焦らされた分だけ量は夥しく、発射に伴う爽快感も、普段の何十倍にも圧縮されていて、しかもそれが、長く、長く続くのである。

「あっは♪ 出てる出てる……せんせーのせーし♪ 手伝ってあげるから、最後の一滴まで気持ち良いよーく、搾り出されちゃおうね♪ せーらの手でシコシコされて出しちゃったってこと、しっかり意識しながら、ね……♪」

「あっ、あっ、ふああああ……」

精液を搾り上げるように、脈動するペニスを根元から扱き上げられる。

少女の容赦のない追い打ちに腰砕けになった薫は、溜めに溜めさせられた濃厚な雄のエキスを水中に放出した。

逞しい男性教師が教え子である少女の腕の中で表情を蕩かし、腑抜けそのものの悲鳴を上げ悶絶するその様子は異様の一言に尽きた。

だが、待ち望んだ快樂に酔い痴れる薫は、そんな風に自分を客観視することさえ出来なくなっていた。

「あはは……たっぷり、でたねえ……最初はあれだけ嫌がってたのに、結局はお漏らししちゃうんだね……」

長い射精が終わり、脈動の収まったペニスから手を離し、聖蘭がくすくすと笑う。

「あ、ああああ……」

薫はヘナヘナと膝を折り、プールサイドにもたれかかった。

腰に全く力が入らない。睾丸の中にあつた精液を全て搾り出されたような気分だった。

「せんせ、そんなに、せーらの手、気持ち良かった？」

「あ、ああ……」

「あっは♪ 素直だね〜♪ でもさ、素直なものいいけど、教え子におちんちん扱かせで、気持ちよくなっちゃうなんて教師として、最低、だと思わない？」

聖蘭はニコニコと笑いながら、最低の部分強調して言った。

「し、白峰……！」

俺は、なんてとんでもないことをしてしまったんだ——。

大人であり、教師であり、既婚者でもあるというのに、一時の快楽に流されて、女子生徒の手の中で射精してしまった。

絶頂を迎えたことで冷静さを取り戻した頭が、事態のまずさを理解し始めた。

「こんなことが誰かにバレたら、せんせーどうなるのかなあ？」

背筋がプールの水よりも冷たくなっていく。

懲戒免職。いや、最悪裁判沙汰だ。

手を出してきたのが向こうだし、証拠はない。

けれど、証言だけでも波風は立つ。世間は白い目を剥ける。ロリコン教師とメデイアは大喜びで騒ぐかもしれない。

そうになったら、どのみち教師を続けていられない。

「恵子せんせーが知ったら、すっごく悲しむだろうなあ……」

薫の脳裡に、最愛の妻の顔が浮かぶ。

彼女ならどんなことがあっても、自分を信じてくれるかもしれない。

だが、生徒の手の中で射精したのは、動かしようのない事実なのである。

胸を張って、清廉潔白を主張できない。

（最低だ。俺は、なんて最低野郎なんだ——）

懲戒免職。離婚。ロリコン教師。人間失格。世間の目。悪い考えばかりが、頭の中をグルグルと巡る。

「し、白峰……頼む、それだけは……」

自分自身でさえ驚くほど引き攣った情けない声が出た。

不安に押し潰されそうになった薫には、生徒相手に懇願する以外の行動は選べなかった。

「大丈夫。せーら誰にも言わないよ」

ニコツと朗らか笑って、聖蘭はプールサイドへ上がった。

そして、ホツと安堵の息を漏らす教師を見下ろして、

「お疲れ様、せんせ♪ とつても愉しかったよ。また、次のプールの時も、せーらの特訓に付き合ってくれるよね？」

薫には頷くしかなかった。

今の言葉の中に、付き合わなければ今日のことはバラす、という意味が含まれていることは容易に理解出来た。

特訓。それが水泳の特訓だとは到底考えられなかった。

真夏の昼の日差しに炙られているのに、薫の背中では凍るほど冷たくなっていった。

こんなに上手くいくなんて。やっぱり、男なんて簡単だ——。

学校からの帰り道、水泳セットを片手に下げた白峰聖蘭は小悪魔チックに笑った。

思った通り、黒谷薫は藤堂栄と同じタイプだった。

真面目で、なんでも話せば分かると思っっている人格者。

中々誘いには乗ってこないけれど、こちらから強引に仕掛けてやると、抵抗はしても最終的には流されてしまう。

栄は自らの体面を保とうとしながらも、徐々に聖蘭の胸に溺れ、深みにはまり、とうとう戻れなくなった。

しかし、薫は男とはいえ子供じゃない。油断は禁物だ。  
じっくりと、時間をかけて攻略しないといけない。その方が確実だし、なにより面白い。  
きつと、あいつは誰にも相談しないだろう。

男は、特にあの手のタイプは一人で何でも解決しようとする。

大抵は、それで解決できるのだろう。だけど――

「絶対、逃がさないからね……せんせ」

白峰聖蘭は肉食獣めいた貪婪な舌なめずりをして、濡れた前髪を掻き上げた。